

3

行書の「点画の連続・変化・省略」を 動的・静的な視点から追究しよう(二年)

上越教育大学附属中学校指導教諭 清水陽一郎

さまざまな実践をされている清水先生の連載(全三回)です。

最終回である今号では、ICT機器を活用して、行書の特徴を学ぶ授業をご紹介します。



しみずよういちろう
清水陽一郎

1970年生まれ。東京学芸大学書道科卒業後、新潟県中学校教諭を経て、上越教育大学大学院にて書写指導について研究。現在、上越教育大学附属中学校指導教諭。全国大学書写道教育学会会員。上越国語教育連絡協議会書写委員。

1 題材の目標

- ・行書の「点画の連続・変化・省略」に興味・関心をもつ。
- ・動的な視点から「点画の変化・省略」を捉え、運筆練習を繰り返し、技能の向上を図る。
- ・課題語句における審査観点を動的に捉え、運筆の過程を静的視点と動的視点を結び付けて思考し、理解する。

2 学習の流れ(全三時間)

- 今年の書き初めの課題(「白銀の峰」)について、五つの審査観点を調べる。
- 「点画の連続・変化・省略」について、教科書を確認する。
- 「白銀の峰」の運筆を動画で視聴し、「点画の連続・変化・省略」がどういう運筆によって表れるか知る。
- 動画で運筆(動的視点)を、教材

文字で字形(静的視点)を、それぞれ確認し、結び付けながら練習する。

① 課題の審査観点を確認しよう

一年ぶりの書き初めに、生徒は「うまく書けるかな」と、期待と不安の入り交じった表情を見せていました。

今回は、学年(三学級)を一斉に指導するために、校内のICT機器を活用しました。全体指導はインタラクティブホ



▲IWBで全体への指導を行った。教師の説明を聞く生徒たち。

ワイトボード(※1)以下「IWB」を使って放送形式で行いました。その後、個別練習の場を設定し、生徒がタブレットPC(※2)を活用して学習を進め、教師三名が適宜巡回しながら個別支援を進めるようにしました。この形式で授業を行うことで、書写指導に不安をもつ教師も安心して指導することができそうです。

今回書く行書の「白銀の峰」は、地域で毎年行われている書き初め会(上国連書写技能認定書き初め会)の課題です。この書き初め会では、五つの審査観点があらかじめ示されていて、生徒は審査観点到に○が付くように、練習を重ねます。○の数に応じて「会長賞」「優秀」「優

「良」「佳」の認定証が渡され、「会長賞」の中でも特に優れている作品が「二席」「三席」「三席」に選ばれます。地域の生徒は、認定を楽しみに練習に励みます。

五つの審査観点(①白：全体の連続感

②銀：へんの省略と連続
③峰：へんの変化と呼応

④峰：へんをつくりのつり合い
⑤全体のまとまり

り)を生徒たちに知らせると、「具体的にどのよう書きいたら○になるのかわからない」という声が多く上がりました。そこで、予想される書字例における○と△の基準を明確にした自作のプリントを生徒に配付しました(下参照)。私の観点的説明を聞き、生徒は「こう書くと○になるのか」と口にしなが、基準が書かれたプリントに見入っていました。しかし、プリントに書かれた○と△の基準は、書かれた文字に表れる特徴に焦点を当てているため、どのよう

な運筆で書けばよいのかまではわかりません。

そこで、生徒が動的視点から行書の特徴を捉え、静的視点との統合を図ることができるよう、実際に書いている様子

上国連書き初め会 中2「白銀の峰」 審査観点ごとのポイント	
No	審査観点
①	白 全体の連続感
②	銀 へんの省略と連続
③	峰 へんの変化と呼応
④	峰 へんをつくりのつり合い
⑤	全体のまとまり

※1 インタラクティブホワイトボード
パソコン画面を映写したボード上で書き込みをしたり、その内容を保存したり、パソコン操作をすることができる。
※2 タブレットPC
薄い板状のパソコンで、画面上で操作したり書き込んだりできる。

3 学習の評価

今回の学習では、提出された作品を審査観点に従って審査し、評価しました。評価結果と、○が五つ付いた生徒の作品の一部を以下に示します。

作品における○の数は二〜四個の生徒

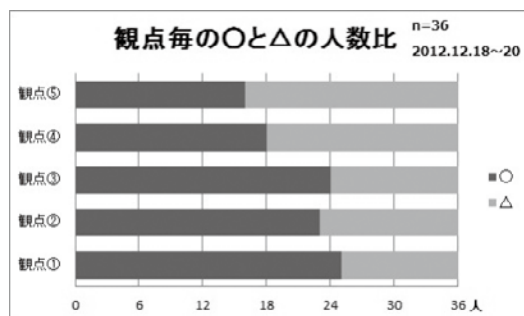
んの省略と連続」の達成度が低いことを見取ることができました。特に、五〜八画目を回転させるように書く省略の運筆が難しいようです。そこで、平仮名の「ま」「ほ」の結びのように、「三角結び」を書くような感覚で五〜八画目を書くように指導しました。

三時間目は紙面に対して四つの文字をバランスよく配置することや、名前を行書で書くことに重点を置いて練習しました。四つの文字を紙面にバランスよく収めるために、「の」を小さめに書いて、その分「峰」を少し上げて書いて最終画が伸びやかになるようにすると、見栄えがよいことに気づいた生徒は、微調整を繰り返していました。

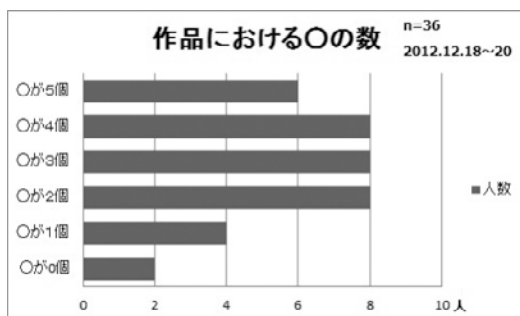
最後に、作品の出来映えについて互いに審査員になったつもりで相互評価を行い、作品を一枚提出させました。



◀○が5つ付いた生徒作品。



▲表2



▲表1



▲動画の一場面。
この映像は、動画投稿サイト (You Tube) にもアップされている。
([「上国連書き初め会」で検索。])

を撮影した動画をIWBで見せて、プリントに書かれた○の基準が、どのように書かれているかを観察する場を設定しました。

私は、生徒に「点画と点画の間の動きに注目して動画を見るように」という指示を出しました。動画を見た生徒たちから、「墨継ぎをしていない」「硯で筆先を直していない」「ひと筆書きみたい」といった声があちこちから上がりました。

その後、生徒に「楷書と行書の運筆で違うのはどのようなところですか」という発問をしました。生徒はしばらく考えて、「行書は流れるように書いている」「トン・スー・トンじゃない」などの気づきを挙げました。

そこで、七月に行った行書の学習 (中学校国語教育相談室69号) 参照) で確認

した「楷書と行書の運筆の違い」を教科書の内容とともに再度提示しました。

▼楷書は「トン・スー・トン」と書き、ストップ&ゴーがあるが、行書は止める部分を止めずに速度を落とすように書く。浮き上がりが少ないので、結果的に連続痕が紙に残る。

▼行書は穂先をほとんど持ち上げずに書く。書き上りが少ないので、結果的に連続痕が紙に残る。

▼行書はなめらかに書字運動をし、運筆距離が短くなるために、点画の形が変化・省略したり筆順が変化したりすることがある。

そして、よい運筆によってよい字が書けることや、動画で運筆を観察し、書けた字を教材文字と比較して運筆の良し悪しを評価しながら練習を進めることを伝えました。

② 動画と教材文字を効果的に使って行書を練習しよう

いよいよ練習に入ります。一時間目は残り二十分ほどでしたので、生徒は動画を連続再生しながら行書らしいなめらかな運筆に慣れることに重点を置いて練習

しました。当校の単元配列では、書写は学期末に集中的に指導するため、生徒は四か月ぶりに持つ筆に苦勞しながらも、勘を取り戻す時間は一年生と比較すると明らかに短くなっていました。

二時間目は、「白銀の峰」の四つの文字それぞれの審査観点に○が付くように、観点を意識して書くことに重点を置いて練習しました。机間指導をしながら審査観点の達成度を見て回ると、「②銀…へ

▶運筆のしかたを動画で確認しながら書いていく。

